

『ダビデの子』についての理解

2022年05月05日

イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が聖霊を受けて、こう言っている。『主は私の主に言われた。「私の右に座れ／私があなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』」このように、ダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。(マルコ福音書 12 章 35 節～37 節)

エルサレム神殿当局は、主イエスを殺害したかったが、民衆が篤く支持していたので、手出しできないでいた。そこで、論争を仕かけてやり込め、民衆の前で無力さ、無能さを見せつけ、民衆の支持を奪い取ろうとした。ところが、どの論争も主イエスの的確な応答に驚愕し、退散せざるを得なかった。彼らは主イエスに問いかけることができなくなった。その時、主イエスの方から「メシアとダビデの関係」について教え始められた。

主イエスの「メシアとダビデの関係」の教えは、主イエスご自身が語られたものではない。明らかに、初代教会が、メシア（キリスト）は誰なのかを語った言葉であるが、主イエスは、こう語ったと記されている。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が聖霊を受けて、こう言っている。『主は私の主に言われた。「私の右に座れ／私があなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』」このように、ダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

イスラエルでは苦難の歴史の中で、メシアの到来を渴望していた。イスラエルを強国に導いたダビデの再来を期待するメシア待望であった。そして、メシアはダビデの子孫から出ると信じられていたので、「メシアはダビデの子」と言っていた。主イエスがろばの子に乗ってエルサレムに入城した時、群衆は「我らの父ダビデの来るべき国に／祝福があるように」と叫んで、迎えている。主イエスをダビデの子メシアとして期待しての歓喜であった。律法学者たちも当然、「メシアはダビデの子」と教えていた。この教えに対し、反論を展開している。ダビデは、聖霊を受けて、「主は私の主に言われた」と言っている。これは「主(神)は私(ダビデ)の主(メシア)に言われた」ということで、ダビデはメシアを「私の主」と呼んでいる。だから、メシアは「ダビデの子」ではないと言っている訳である。

引用された言葉は詩編 110 編 1 節「主は、私の主に言われた。『私の右に座れ／私があなたの敵をあなたの足台とするときまで』」の言葉である。これは王の即位式で、詩人が新王を褒め称えた言葉である。敵を足台にするほど、あなたは力ある王であると褒めちぎっている。詩人の言葉は、「主(神)は、私(詩人)の主(王・ダビデ)に言われた」と、明快に理解される。この言葉を、ダビデとメシアに関係づけることは、無理ではないか。

しかし、初代教会は、このような聖書引用と解釈をしたのである。マルコ福音書の著者は、主イエスが、「このように、ダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアはダビデの子なのか」と反語法で言われたと書いて、メシアはダビデの子ではないと主張している。それは、メシアはダビデに勝る、ダビデとは質を異にする神の子であるからである。だから、これは、主イエスが語られたのではなく、初代教会において、主イエスはダビデを越えたメシア(キリスト)であるという信仰告白を著していると理解するのが正しいであろう。